

大阪府簡易宿所生活衛生同業組合50年誌

Fifty Years' History of the Osaka Prefecture
Urban Hostels' Association

水内俊雄、平川隆啓、富永哲雄（西成プラザ）編

Toshio MIZUUCHI, Takaaki HIRAKAWA Tetsuo TOMINAGA edited,
Nishinari Plaza, Urban Research Plaza, Osaka City University



大阪府簡易宿所生活衛生同業組合 50 年誌

序文

2001年に、この50年誌の10年前にあたる『大阪府簡易宿所生活衛生同業組合40年史』が刊行された。おりしも市内の野宿生活者が8千人を超えるであろうピークの数となり、あいりん地域／釜ヶ崎地域においても簡易宿所のいくつかが相次いで福祉アパート化するときであった。その激変と、後の変化をこの50年誌はカバーすることになる。その意味では最近の10年誌という特色も有しての発刊となる。

この10年間で、この地域を取り巻く状況に大きな変化が生じたことは誰もが認めるところであろう。多くの日雇い労働者は、年を重ね、経済状況の変化とともに縮小した就労機会を失うこととなる。そして最後のセーフティーネットとなる生活保護を受給し、狭小なアパートに居住しながら、地域で生活を送るようになった。さらに、派遣切りやリーマンショックなどが引き金となり、雇用状況はますます激変した。あいりん地域／釜ヶ崎地域全体の今後のありようとも深くかかわるが、人々の居住面を担ってきた簡易宿所の動向は、その中で決定的な役割を果たしてきた。

この重要な役割を担ってきたことを記録に残すことを主眼として、経営者の多くに聞き取りを行うと同時に、この10年間に大阪府簡易宿所生活衛生同業組合と共同しておこなった調査や活動も、あわせて収録することにした。また、新たに発掘された写真や記録なども利用し、50年の歴史を振り返れる工夫も凝らした。事実の記述と、生き活きとした動きを、この1冊に記載におさめるという観点から、50年史とはせずに、50年誌とした次第である。

今回の編集にあたって、大阪府簡易宿所生活衛生同業組合の理事長をはじめ、理事や女性部、事務局の方々にはたいへんお世話になった。厚くお礼申し上げる。執筆にかかわったメンバーは、それぞれの担当章に名前を記載しているが、下記にも一覧しておく。またこの作業は、都市研究プラザの西成プラザの空間をフル活用した。この現場プラザ自体が、簡易宿所組合にご配慮いただいている空間でもある。まさしく現場の社会実験道場から生まれた成果物として、都市研究プラザのレポートシリーズ17号としても公刊している。http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/archives/GCOE_Report17.pdf

水内俊雄	大阪市立大学 都市研究プラザ教授	(序、第1、2、8章担当)
平川隆啓	大阪市立大学 大学院文学研究科院生	(第1、7章担当)
ありむら潜	釜ヶ崎のまち再生フォーラム 事務局長	(第3章担当)
稲田七海	大阪市立大学 都市研究プラザ特別研究員	(第4章担当)
阪東美智子	国立保健医療科学院 生活環境研究部 主任研究官	(第5、6章担当)
松村嘉久	阪南大学 国際観光学部教授	(第7章担当)
富永哲雄	東洋大学大学院 福祉社会デザイン研究科院生	(第8章担当)
宮久保宣治	大阪府立大学 人間社会学部学生	(第9章担当)

4 - 序文

10 - 第1章 数字で追う簡易宿所街

／あいりん地域のこの10年の変化

水内俊雄・平川隆啓

20 - 第2章 この激動の10年強を振り返って

—簡易宿所オーナーへの聞き取りから—

水内俊雄・平川隆啓

32 - 第3章 簡易宿所、この摩訶不思議なるもの

—サポーターティブハウス誕生の頃をふりかえりながら—

ありむら潜

42 - 第4章 生活保護受給者の地域生活と自立支援

—釜ヶ崎におけるサポーターティブハウスの取り組み—

稲田七海

56 - 第5章 『釜ヶ崎サポータータイプハウス居住者調査 2003年』の概要

阪東美智子

64 - 第6章 『簡易宿所の現状と経営意識に関する調査報告書 2004年』の概要

阪東美智子

72 - 第7章 簡宿を国際ゲストハウスへ

外国人旅行者誘致からまちづくりへの道のり

松村嘉久

86 - 第8章 写真でふりかえる簡易宿所街／釜ヶ崎

—上畑恵宣氏写真コレクションから—

水内俊雄・平川隆啓・冨永哲雄

124 - 第9章 新聞記事でみる簡易宿所の描かれ方

宮久保宣治・平川隆啓





簡宿を国際ゲストハウスへ

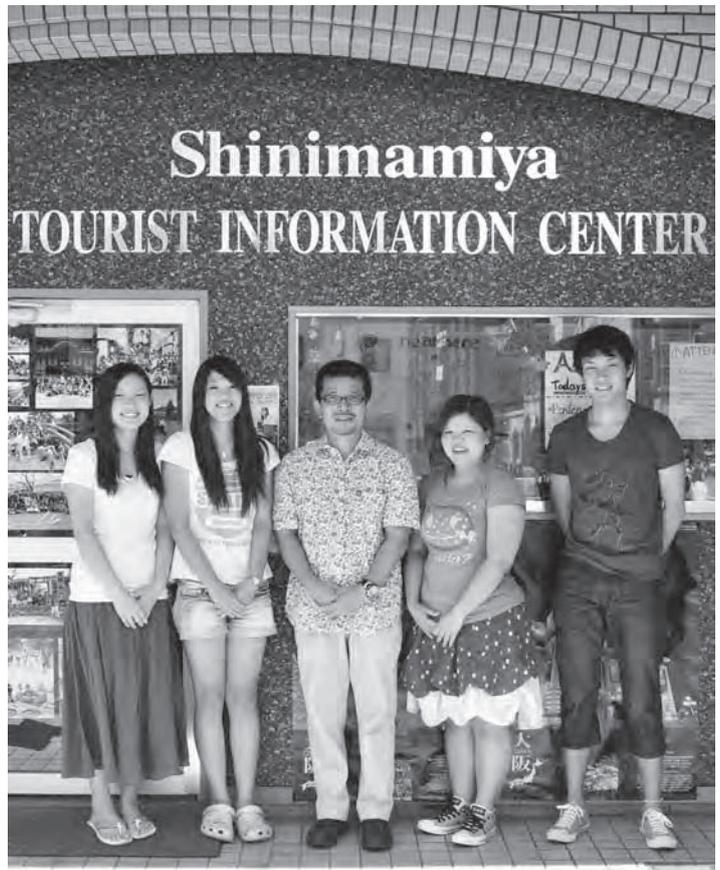
外国人旅行者誘致からまちづくりへの道のり

外国人が労働者であった時代

戦後、釜ヶ崎は、港湾や土木建設などの日雇い労働者が集まり、その労働者たちが一時的に住む居住空間の簡宿が地域の核となって「ドヤ街」として成立し、高度経済成長期からバブル経済期にかけて寄せ場として成長してきた。戦後の釜ヶ崎にドヤができた時から、そこには外国人が投宿していた。ただし、この場合の外国人は、旅行者ではなく、匿名性の高い日雇い労働者であった。

JR 大阪環状線の桃谷駅から玉造駅にかけての外側は、今でも在日コリアンが多く住む地域である。在日コリアンのなかには、済州島四・三事件とその後の弾圧から逃れるため、親類縁者を頼って密航して来た者も少なくない。終戦直後に朝鮮半島に帰還したものの、その後の朝鮮戦争の混乱を避け、再び密航して来た者もいた。いずれにせよ、戦後の焼跡闇市の混乱期、正当な手続きを経ないで日本へ入国、あるいは緊急避難してきた外国人は、不法入国が発覚すれば逮捕送還される危険性があるので、匿名者として、釜ヶ崎の簡宿から建設現場へ通う者も当然いた。

1985年のプラザ合意から円高が急速に進み、日本経済はバブルへと突入していく。釜ヶ崎の日雇い労働の日当の相場も1万円を超え、それに円高が加わったため、何日か釜ヶ崎で労働するだけで、アジアの都市住民の月収分、農村住民ならば年収に近い賃金が稼げる状況となった。バブル期、



新今宮 TIC の現在の外観

日本で働いて大金を稼ごうと、アジアや中南米など世界各地から、若い労働者たちが日本を目指した。日本の沿海部では、1989年頃から、大勢の外国人を乗せた船が漂着する密入国事件が多発し始める。こうした「偽装難民」の実態は、おおむね中国からの出稼ぎ労働者であった。出発地の福建省では「蛇頭」と呼ばれる密航ブローカーが、到着地の日本でも反社会勢力が暗躍し、産業界が安い労働力を求める情勢のもと、密航が裏ビジネスとして成り立った。1990年代に入りバブルは崩壊へと向かったが、この手の密航事件は先進国の宿命ともいえ、今なお絶えない。

「ジャパゆきさん」という言葉ができた1980年代、世界の国々から観光ビザや就学ビザで合法的に来日して、許可された期限を超えて「不法滞在」し、国が認める在留資格外の労働に「不法就労」する者も急増する。日本各地の生産・建設現場で、外国人研修生が日本人よりも安い賃金で働き、不法就労の外国人がキツク、汚く、危険な3K労働に従事する姿が日常的な風景となった。「何が何でも日本へ!!」、そんな時代であった。

日本政府が唯一、合法的な外国人労働者として受入れたのは、日系人の2世・3世とその配偶者であり、1990年の入管法改正からのことであった。密航事件の発覚や不法就労の摘発などは、氷山の一角に過ぎず、1980年代から1990年代にかけての外国人労働者の就労は、産業界からの強い要望を背景に黙認される傾向が強く、分厚く存

在したことは間違いない。

釜ヶ崎でも1980年代から1990年代にかけて、韓国・中国からの労働者だけでなく、フィリピン・イラン・スリランカ・パキスタン・バングラデシュからの労働者たちも、日本人労働者に交じりセンターで求職する姿がよく見かけられた。バブル最盛期、センターで求職する外国人労働者は、100名を優に超えていたと回顧する関係者が多い。就学ビザで大阪市内の日本語学校に通い、生活費を稼ぐため自宅アパートからセンターへ通う就学生もいた。存在そのものが「不法」な状態に置かれていたので、その実態は明らかではないが、釜ヶ崎の簡宿やアパートで寝起きしながら建設現場へ通う外国人も、間違いなく存在した。

バブル期を通して、釜ヶ崎のみならず、日本において、「外国人」や「アジア人」に対する胡散臭いものを見るような冷たいまなざしが形成された。「外国人」や「アジア人」は決して「旅行者」ではなく、日本人と仕事を奪い合う「労働者」、それも「不法」な労働者である、という深層でのイメージや感覚が、残念ながら、広く共有されていたように思う。21世紀に入って、簡宿と地域の両方を再生する方法のひとつとして、外国人旅行者を積極的に受入れる方向性が打ち出されるが、その際も、そうした不幸な「まなざし」の呪縛を強く感じ、慎重で周到な戦略立案と関係各所への丁寧な説明が求められた。

バブル景気で変容する簡宿

ドヤからビジネスホテルへ

バブル期、釜ヶ崎では簡宿の新改築ラッシュが起こり、大きな変容を遂げる。かつて「カイク柵」と呼ばれた木造ベッドが並ぶ大部屋は、1970年代の大阪万博景気で個室化が進み急速に変わったが、建物自体は依然と木造低層建築のところが多かった。バブル期の新改築ラッシュで、そうした木造低層建築の簡宿は少なくなり、高層鉄筋建築の簡宿が増えた。簡宿の個室も、かつての1畳程度の狭隘なものから、3畳程度へと広がり、部屋の備品もテレビ・冷暖房完備は当然、ビデオや衛星放送を備え付けるところも出てくる。個室にバス・トイレこそさすがに無かったが、便利な個室シャワーや広く快適な共同大浴場などをウリにするとところもあった。

高度経済成長期からバブル景気を経て、簡宿は少し狭くバス・トイレの無いビジネスホテルへと変容した。設備がよくなった分、宿泊料金もあがり、その相場は500円から1,500円くらいであったのが、1,500円くらいから2,500円くらいとなった。旅館業法にて「簡易宿所営業」とは、「宿泊する場所を複数人で共用する構造及び設備を主とする施設を設け、宿泊料を受けて、人を宿泊させる営業」と定義されているが、釜ヶ崎の簡宿の多くは、もはやこの定義に当てはまらない存在となった。

新改築ラッシュで簡宿がビジネスホテル化した結果、従来からの顧客である日雇い労働者だけでなく、格安ホテルとして、一般のサラリーマンや旅行者も簡宿を利用し始める。そもそも釜ヶ崎の立地条件は良好で、新世界や飛田という歓楽街に近いこともあり、簡宿からビジネスホテルへと変貌を遂げた宿泊施設のポテンシャルは高かった。ネックとなるのは、大阪人や日本人が描く釜ヶ崎やドヤに対する劣悪なイメージであり、それさえ払拭できれば、ドヤ街ではなく格安ホテル街として再生する道も見えた。バブルの最中は、建設現場から戻るとスーツに着替えてミナミへ飲みに出かける日雇い労働者と、ミナミで飲み過ぎ終電を逃し泊まりに来るサラリーマンが、同じ簡宿に泊まっていた。

外国人に関しても、ビジネスホテル化した簡宿には、センターで求職するアジアからの外国人労働

者が宿泊する一方、円高で格安ホテルを求める外国人旅行者が宿泊することも増えてきた。外国人の「旅行者」の出現である。国際花と緑の博覧会の開催で大阪が注目された1990年6月、ホテルサンプラザは外国人旅行者に対応して人気を得ている、と朝日新聞の記事で紹介されている（表1参照）。この新聞記事が、釜ヶ崎の簡宿の外国人対応で最初のものであろう。

しかしながら、バブル期の簡宿には、早朝から工事現場に通うアジア人男性もいれば、夕方になると身支度してミナミの高級クラブへ出勤する欧米人女性もいて、そこに同宿する外国人「旅行者」に向けられたまなざしは冷たかった。アジア人ならば「どうせ働きに来たんやろう?!」という露骨な偏見、欧米人へのまなざしも、「もしかしたら働く気ですか?!」という不信感に満ち溢れていた。

花博が終わった直後の1990年10月、西成署の警官汚職事件を契機として、釜ヶ崎で実に17年ぶりの大規模な「暴動」が起こった。路上の自転車や駅舎が燃え血まみれの労働者が興奮する映像、労働者と機動隊との間で展開した激しい市街戦さながらの映像が、数日にわたりテレビのニュースやワイドショーで流れた。バブルで平和ボケした多くの日本人がこれを見て驚き、「釜ヶ崎は怖いところ」という地域イメージが、一般市民のなかで拡大再生産されていった。この暴動が終息した頃から、日本のバブルは崩壊の道へと歩みを進め、寄せ場・釜ヶ崎は、日雇い労働者のまちから野宿とホームレスのまちへと変わり、従来からの地域のあり方も、大きな変容を迫られることになる。

簡宿から福祉マンションへの潮流

バブル崩壊後の建設不況と日雇い労働者の高齢化が重なった釜ヶ崎では、簡宿の宿代が払えず野宿生活する者が1993年頃から急増する。阪神・淡路大震災の復興事業で日雇い労働需要はかなり回復したが、高齢化した労働者に仕事は回ってこなかった。大阪市は1998年11月、市内に8,660名の野宿生活者が存在するとの調査結果を発表したが、そのうち西成区が1,910名で市内最多、隣接する浪速区(1,585名)と天王寺区(1,084名)を合わせると、市内全域の過半を超えた。私もこ

の調査に参加したが、JR 天王寺から JR 新今宮にかけての夜の路上は、昼間の風景とは全く異なり、段ボールハウスが並び野宿であふれていた。

同じ頃、釜ヶ崎の簡宿は、どこも客室稼働率が大きく落ち込み、存亡の危機に瀕していた。従来のお客様であった日雇い労働者は、高齢化して仕事もお金もなく野宿を余儀なくされていた。携帯電話で手配師や雇用主と直接つながる若い労働者は、釜ヶ崎の外のより条件も環境も良い住居から現場へ通いだしたため、釜ヶ崎へ流入する労働者は大幅に減ってゆく。1990 年の暴動で強化された地域イメージに加え、路上が野宿であふれる異常事態のなか、日本人のビジネスマンや旅行者たちも簡宿に来なくなった。従来からの顧客が路上で寝て、新たな顧客も獲得できない状況のなか、簡宿は全く先を見通せない状況に陥った。

状況が変化し始める契機となったのは、1999 年から 2000 年にかけて、「釜ヶ崎のまち再生フォーラム」の呼びかけで、釜ヶ崎の各方面で活躍する方々が集まり、野宿問題への対応とまちづくりを考えるワークショップが積み重ねられたことであろう。ここでの議論とネットワークのなかから、生活保護制度を利用して、高齢の野宿生活者に安定した居住と生活支援を提供し、地域での自立につなげる「サポーターハウス」という概念が生まれた。2000 年 6 月にアプリシエイトが開設されて以降、陽だまり、おはな、フレンド、イノセンス、コスモ…と、簡宿からサポーターハウスに転業するところが続出した。

住み慣れた地域の住み慣れた簡宿を安定的な住居とすることで、いわば漂流者であった釜ヶ崎の日雇い労働者を定住者に変え、地域に根付いてもらい、まちづくりにつなげようという発想である。現在では、特別な生活支援を行わない施設も含めて、福祉マンションという呼び方が一般的になっている。

簡宿から福祉マンションへという潮流は、その後も止まらず続いたが、地域の将来を決定付ける不可逆的な選択を迫るものでもあった。簡宿での生活保護受給者の受入れを大阪市が頑なに認めてこなかったため、福祉マンションへ転業した簡宿は、例外なく簡宿営業許可を返上し、宿泊施設から生活保護制度の活用を前提とする居住施設へと転換することになった。結果として、1980 年代の最盛期に 200 軒を超えた簡宿は、廃業と福祉マ

ンションへの転業が相次いだため、実質は 60 軒余りに減った。

福祉マンションに転業したところは、そのままの状態で簡宿営業許可やホテル営業許可を再び取り直すことができないため、釜ヶ崎に慣れ親しむ労働者たちが確実に減っていくなか、地域の内外で生活保護受給者を探し求め続けることになる。福祉マンションが急増する一方、公園の仮設一時避難所や夜間シェルターなどが開設され、21 世紀に入ってからの数年で、路上での深刻な野宿問題は、本質的な解決に至らないもののかかなり和らいだ。

外国人旅行者誘致への胎動

釜ヶ崎のまち再生フォーラムが 2000 年 7 月に描いた「釜ヶ崎のまち再生 2nd (セカンド) ステージ」のなかに、簡宿の再生方法のひとつとして、「10 の条件をそろえてバックパッカーの拠点地域にする」というものがあつた。ありむら潜さんが本誌でも紹介しているが、提案者 S さんらと練り上げた「10 の条件」は的を射ており、その先見性と洞察力には驚かされる。

ただし、2005 年 3 月の簡宿組合大会にて、大阪国際ゲストハウス地域創出委員会（以下、OIG）の結成が承認されるまで、釜ヶ崎では野宿問題が深刻であったため、外国人旅行者の積極的誘致など言い出し難く、外野から働きかけたとしても実現しそうでない状況にあつた。提案者 S さんが描いた夢の舞台の機が熟するまで、さらに数年が必要であった。とは言え、その期間中にも、外国人旅行者誘致の可能性を見いだせるいくつかの兆候があり、簡宿が外国人旅行者向けの国際ゲストハウスに生まれ変わる胎動があつた。

最大のチャンスは、2002 年の日韓共催ワールドカップ（以下 WC）であつた。東京の山谷、横浜の寿町などは、このチャンスに、外国人旅行者の受入れに向けて大きく舵を切る。しかしながら、暴動の系譜を持つ釜ヶ崎は、積極的に外国人旅行者を誘致する姿勢を打ち出せなかつた。大阪の長居スタジアムで行われた 3 試合のなかに、イングランド・ナイジェリア戦とトルコ・セネガル戦が含まれたことも、釜ヶ崎にとっては不運であつた。大阪府警は悪名高きフリーガンが釜ヶ崎に潜入し、野宿で鬱積した路上の不満を扇動し、暴動

になることを恐れた。赤い悪魔の異名を持つ熱狂的なトルコサポーターが、釜ヶ崎の路上で大騒ぎして暴動につながることも恐れた。

大阪府警は簡宿組合関係者を集め、フリーガンが騒ぐ映像を見せて、WC 期間中は怪しげな外国人を宿泊させないよう、強く協力を要請した。WC 期間中、釜ヶ崎に宿泊する外国人サポーターもいたが、メディアからはあまり注目されなかった（表 1 参照）。

ただし、WC で外国人旅行者が新たな顧客になり得るかもしれない、という確信を得た人物がいた。ホテル中央グループ社長（当時）の山田純範さんである。ホテル中央グループは 2000 年、ホテルを紹介する日本語ウェブサイトを立て上げたが、これを見て日本語のわかる韓国人や台湾人からの問い合わせと宿泊が増えた。

ホテル中央グループは、WC という商機を目前に控えた 2002 年、この兆候に敏感に反応して、英語・中国語・韓国語でウェブサイトを多言語化する。それ以降、このウェブサイトを見て、外国人旅行者が来るようになる。当初は、日本で就学や就労している外国人、外国人留学生や英会話教師などが、国内旅行として利用することが多かった。日本経験が豊富で日本語もわかる者たちから、口コミやネット上で日本語や外国語で情報発信された意義はとて大きい。

後に OIG の委員長となる西口宗宏さんも、香港・台湾でのホームレス問題の現場を視察する経験のなかから、釜ヶ崎の簡宿街がゲストハウス街として生まれ変われるのではないかと考えるようになる。水内俊雄さん（大阪市立大学）を研究代表者とする「東アジアのホームレス問題研究会」で、西口さん、松村嘉久（阪南大学）、ありむら潜さん、中山徹さん（大阪府立大学）、織田隆之さん（当時救護施設勤務）らが、2002 年から 2004 年にかけて、香港や台湾の野宿支援の現場を一緒に視察して、交流を深める機会に恵まれた。

2003 年 1 月、香港九龍のインナーシティを視察した後、西口さんと松村は、香港の有名な安宿雑居ビルの重慶大廈（チョンキンマンション）へと向かった。複雑な構造の雑居ビル群に入る安宿のいくつかを見て、重慶大廈やそこに宿泊する外国人の実態を松村が説明して回った。重慶大廈の屋上で、「ここに外国人が泊まるんやったら、釜ヶ崎の簡宿でも絶対に行けるよな」、と西口さんが

語ったのを松村は鮮明に覚えている。施設の内実、宿泊価格、治安、立地、利便性、どれをとっても、重慶大廈よりも釜ヶ崎の条件の方が良かった。

2003 年 8 月、水内さんや松村も関わる「東アジアオルタナティブ地理学会議」が東京と大阪を会場に行われた。香港・台湾・韓国を中心に世界の国々から参加した 50 名以上が、大阪ではホテル中央とホテル中央新館（現・ホテルセレーネ）に分宿し、大阪市内の野宿の実態を視察するフィールドワークが組まれた。

参加者は海外での調査滞在経験が豊富な地理学者で、いわば絶好の外国人宿泊モニターであった。この時の為替レートは 1\$ が 120 円前後だったので、1泊 20\$ 弱、18\$ くらいの感覚であった。釜ヶ崎の立地と環境、ホテルの設備と価格など、松村は外国人参加者たちに評価を聞いて回った。その結果は、「大阪のダウンタウンのど真ん中に、この値段でこの設備なら、リーズナブルであり、香港やバンコクと比べてもこちらの方がいい」という趣旨の意見が圧倒的であった。松村もこれで、釜ヶ崎が国際ゲストハウス地域として生まれ変われるとの確信を得た。

「若者」・「バカ者」・「よそ者」の集結

アジアの国際都市が急成長を遂げるなか、格安志向の外国人旅行者が利用する海外のゲストハウスは、洗練され充実化が進み、釜ヶ崎の簡宿と変わらないほどの宿泊料金にまで上がった。一方、バックパッカーの嗜好にも変化が見られた。1980 年代までのバックパッカーは、小田実の『何でも見てやろう』のような貧乏旅行を好んだ。その後、欧米人ならば「Lonely planet」、日本人ならば「地球の歩き方」を持ち歩く若者が急増し、バックパッカーの大衆化が急速に進む。急増したバックパッカーは、格安志向であるが、決して「安かろう、悪かろう」ではなく、「リーズナブルでそれなりに快適な」空間を求めた。

そもそも円高日本は、何かにつけ物価が高いというイメージで外国人旅行者、特に欧米のバックパッカーからは見られていた。しかしながら、21 世紀に入ると、大阪の釜ヶ崎、バンコクのカオサン、香港の重慶大廈を横並びで見比べても、釜ヶ崎の宿泊コストの割高感はあまりなく、むしろリーズナブル感が高くなった。バブル崩壊後のデ

表1 外国人・一般旅行者対応に関する主な報道および対外的な広報活動

日付	メディア名	タイトル
1990年06月02日 (土)	朝日新聞夕刊	昔「ドヤ」、今や「外国人宿」あいらん地区で人気
2002年04月25日 (木)	朝日新聞夕刊	労働者減る「あいらん」の簡宿、外国人客の商機獲得へ
2002年06月11日 (火)	読売新聞夕刊	あすW杯イングランド戦外国サポーター大阪に続々 安宿のあいらん、YH人気
2005年04月07日 (木)	朝日新聞朝刊	外国人呼び込み作戦「あいらん地区」の簡易宿泊所 閑空にパンフ、HP情報も
2005年04月07日 (木)	読売新聞朝刊	外国人旅行者いっしょい 簡宿組合が誘致作戦 大阪・あいらん地区
2005年04月18日 (月)	NHK総合テレビ 『かんさいニュース1番』	変わりゆく簡宿宿所 (ホテル中央ロビーからの生中継)
2005年06月06日 (月)	The Daily Yomiuri	Power of Tourism, Cheap hotels in Osaka day laborer district lure foreign tourists. Airin has potential to be backpackers' town
2005年06月06日 (月)	The Daily Yomiuri	Room service; Cheap hotels in Osaka day laborer district lure foreign tourists
2005年10月13日 (木)	産経新聞夕刊	「ヤスイがイチバンや」泊500円 外国人客万来 西成の簡易宿泊所
2005年11月07日 (月)	読売テレビ 『ニューススクランブル』	意外?!外国人旅行者に人気の街
2005年11月11日 (金)	朝日放送『ムーブ!』	西成・簡易宿泊所 新たな試み
2005年11月22日 (火)	朝日放送 『ごきげん! フランニュー』	西成簡易宿泊所事情
2006年06月26日 (月)	読売新聞朝刊	国際化する簡易宿泊所
2006年07月22日 (土)	NHK総合テレビ 『Weekend 関西』	「下町ツアー」で大阪に外国人を
2006年08月10日 (木)	毎日新聞夕刊	簡易宿泊所：外国人旅行者倍増 格安ホテルにリニューアル大阪・あいらん地区
2007年02月16日 (金)	「関西元氣宣言」 発信運動本部主催	『第2回関西元氣な地域づくり発表会』、松村嘉久ほか「大阪国際ゲストハウス地域を創出する重要性と可能性を探るなかで」を発表
2007年02月16日 (金)	「関西元氣宣言」 発信運動本部主催	『第2回関西元氣な地域づくり発表会』、西口宗宏・山田英範、松村嘉久「西成区あいらん地区の外国人旅行者を活かした地域づくり」を発表
2007年06月09日 (土)	読売新聞夕刊	あいらん宿場変容 労働者向け外国人旅行者急増 格安「口コミ」パソコンあり
2007年06月11日 (月)	毎日放送『ちんぷいぷい』	今外国人に人気の街とは…?
2007年07月24日 (火)	読売テレビ 『ズームイン!! SUPER』	労働者の街が変わる!
2007年08月20日 (月)	毎日新聞夕刊	陸上：世界選手権 ホテルの陣、「追い風」と「期待外れ」 格安「あいらん」人気
2007年08月29日 (水)	朝日新聞夕刊	外国人宿、あいらん人気「労働者の街」変身中 世陸も泊車、旅行者に活路
2007年08月29日 (水)	TBS『筑紫哲也NEWS23』	ネットカフェの原点? 大阪「釜ヶ崎」に変化の兆し
2007年08月30日 (木)	産経新聞夕刊	西成・あいらん地区 簡易宿泊所外国人に大モテ 世界陸上追い風 低価格が好評
2007年08月30日 (木)	読売新聞夕刊	世界陸上「OSAKA」満喫 選手や取材陣、魅力を世界へPR
2007年08月31日 (金)	The Daily Yomiuri	Reporters get chance to see sights
2007年09月04日 (火)	ABC『NEWSゆう』	「労働者の街」が大変身 外国人旅行者に人気の「あいらん」
2007年09月26日 (水)	テレビ朝日 『スーパーチャンネル』	シリーズ「あいらん」の今 外国人客招致作戦編 異変!労働者の街あいらん 人気沸騰!外国人5万人
2007年10月24日 (水)	朝日放送『ムーブ!』	外国人旅行者で街再生 生まれ変わる西成の今
2007年11月15日 (木)	産経新聞朝刊	【元氣宣言】大阪府西成区・簡易宿泊所生活衛生同業組合理事 山田英範さん
2007年11月17日 (土)	読売新聞朝刊	【共存アジア・関西】人荷往來 (6) 外国人集客で「まち」再生
2008年10月12日 (日)	毎日新聞朝刊	毎日新聞大阪発行120年：興す!地域の明日 経済 外国人観光客、「関西」を有名に
2009年01月26日 (月)	読売新聞夕刊	外国人向け観光センターオープン 学生や留学生らが案内 大阪・あいらん地区
2009年01月26日 (月)	産経新聞夕刊	簡易宿泊所で国際観光案内 学生がお薦めスポット 西成・あいらん地区
2009年02月04日 (水)	朝日新聞夕刊	外国の旅人に大阪売り込め 簡宿利用者急増 阪南大生、西成に案内所
2009年02月13日 (金)	NHK総合テレビ 『ニュースプラス1関西』	外国人向けに観光案内所
2009年02月23日 (月)	International Herald Tribune	Students point way for foreign guests in Osaka slum
2009年03月13日 (金)	日本経済新聞夕刊	外国人客対象に下町観光を提案
2009年04月26日 (日)	読売新聞朝刊	大阪・あいらん拠点の外国人用ガイド 阪南大生、きょうから観光情報調査
2009年05月26日 (火)	毎日新聞朝刊	なにわアカデミー 41 阪南大国際観光学科・松村ゼミ
2009年06月07日 (日)	The Japan Times	University students turn into free Osaka guides
2009年07月11日 (土)	関西テレビ 『FNNスーパー』	大阪・西成区 簡易宿泊所街で観光案内
2009年07月11日 (土)	読売新聞夕刊	阪南大生ら運営 外人旅行者向け案内所オープン
2009年08月09日 (日)	読売新聞朝刊	【風の標】 訪日旅行者誘致 観光資源は身近にある
2009年09月21日 (月)	テレビ朝日 『スーパーチャンネル』	労働者の街・大阪あいらん 外国人旅行者が急増の理由
2009年12月15日 (火)	経済産業省主催	「社会基礎力育成グランプリ2010西日本予選大会」、「新今宮観光インフォメーションセンター」の運営と国際ゲストハウス地域づくりに向けた社会的実践」で阪南大学松村研究室が優秀賞獲得
2010年03月05日 (金)	経済産業省主催	「社会基礎力育成グランプリ2011全国決勝大会」、「新今宮観光インフォメーションセンター」の運営と国際ゲストハウス地域づくりに向けた社会的実践」で阪南大学松村研究室が準グランプリ獲得
2010年03月12日 (金)	「関西元氣宣言」 発信運動本部主催	『第3回関西元氣な地域づくり発表会』、松村ほか「新今宮観光インフォメーションセンター」の運営とまちづくりに向けた社会的実践」を発表
2010年03月17日 (水)	朝日新聞夕刊	あいらんに就活新拠点 学生自衛策「安さ・ネット設備を優先」
2010年03月24日 (水)	産経新聞朝刊	外国人旅行者向け街歩きツアー開催 31日から もっと知って 関西の魅力
2010年04月11日 (日)	読売新聞朝刊	【おさか写真散歩】負けへん!節約就活 あいらん地区
2010年05月15日 (土)	センターだより (第42号)	えーっ?!「釜ヶ崎」に観光案内所!?
2010年06月30日 (水)	大阪日日新聞	大阪自立 再生するまち現状を見つめて<>>大学と地域の連携「民設学舎」スタイルで新今宮TICを常設
2010年7月	大阪観光コンベンション協会 「大阪観光プラン支援事業実行委員会」	平成22年度「大阪へ行く」大阪で遊ぼう!アイデアプラン支援事業」で「大阪国際ゲストハウス地域を宿泊拠点とする滞在型観光の促進」が認定
2010年08月17日 (火)	日本経済新聞夕刊	外国人さんいっしょい (5) ナニワ観光安く満喫
2010年08月30日 (月)	TheNikkei Weekly	Students help budget travelers find their way
2010年11月29日 (月)	大阪日日新聞	お茶の味が?外国人観光客街歩きツアー
2010年12月01日 (水)	The Japan Times	Osaka Laborer flophouses reborn as foreign visitor inns
2011年02月01日 (火)	快速都市実現委員会	第3回ゆめづくりまちづくり賞奨励賞を阪南大学松村研究室が受賞
2011年04月11日 (月)	産経新聞夕刊	通天閣で元気を 避難者に無料入場券 地元ボランティア配布
2011年04月12日 (火)	毎日放送『ちんぷいぷい』	通天閣の無料入場券をホテルに配布



背景の新聞

- 読売新聞夕刊2007年6月9日
1面トップの扱いに関係者一同がびびりました。
- 朝日新聞夕刊2007年8月29日
2007年の世界陸上絡みでもたくさんの取材を受けました。なかでもこの記事は扱いが大きかった。
- 大阪日日新聞2010年6月30日
OIGや松村研究室の活動を初めて正面からまちづくり運動と捉えてくれた記事。扱いも1面トップの特集で大きかった。
- JAPAN TIMES2010年12月1日
英字新聞での報道は外国人に対して、とても良いアピールになります。

フレスパイラルの功罪で、日本の生活コストの割高感も急速に弱まった。

急成長を遂げたアジアの大都市の住民たちも経済力を高め、海外旅行へ行こうという機運が芽生え始めた。経済大国であり独特の文化を持つ日本の現実をぜひ見たい、という潜在的な観光需要は、欧米でもアジアでも分厚く存在する。大きな障害は日本国内での高い観光コストであったが、釜ヶ崎は、リーズナブルで快適な空間を大量に供給できる状況にあった。釜ヶ崎の野宿問題はなお深刻であったが、福祉マンションや夜間シェルターの利用で、昼と夜の景観が大きく異なるような事態は、少なくとも、太子1丁目界限では見られなくなっていた。

決定的な胎動は、2004年12月突然起こった。東アジアのホームレス問題研究会で交友を深めた西口さんから松村へ、「面白い奴がおる。会わせていから来て。」という連絡が入った。阿倍野再開発地区のとある居酒屋に駆けつけると、そこには西口さんほか、水内さん、ありむらさんらもいて、外遊から帰国したばかりの元気な若者を紹介された。この若者が山田英範さん（当時ホテル中央グループ専務）で、松村は初対面であった。英範さんは山田純範さんのご子息で、12月からホテル中央グループの経営に関わり始めたとのこと。

バックパッカー経験が豊富な英範さんは、「釜ヶ崎をタイのカオサンのように、バックパッカーが集うまちに変えたい」という熱い想いを皆に語った。松村もかつてはアジアを放浪したバックパッカーで意気投合。西口さんによると、簡宿組合と

しても英範さんの想いを受けとめ支援する体制であるとのこと。そこで西口さんから、「松村君も、知識と経験を活かして、外国人旅行者を誘致する活動の輪に入ってくれへんか」と誘われることになる。

観光まちづくりの現場では、「若者」、「バカ者」、「よそ者」の三者が必要だといわれる。既存のしがらみに囚われず未来を見据えて行動する若者の英範さん、他人に何と思われようが地域を愛して信念に基づきやり抜くバカ者の西口さん、地域の外から状況を冷静に分析してアドバイスするよそ者の松村、今にして思えば、2004年12月にこの三者が集結した。具体的には、英範さんが外国人旅行者誘致の現場を、西口さんが地域との調整を、松村が専門家の立場から提言を担当する構図が出来上がり、釜ヶ崎で活躍する様々な人々が見守る態勢が整った。外国人旅行者の積極的誘致に向けて機が熟するなか、山田英範さんという触媒を得て、化学反応は爆発的に進む。

OIGの結成について

2005年3月の簡宿組合大会で、外国人旅行者の積極的誘致に向けた組織を立ち上げるべく、2004年末から2005年初めにかけて、西口さんが中心となって有志を募り、簡宿組合事務所にて何度か会合が開かれた。当初の会合から、西口さん、英範さん、浅田裕広さん、大倉康弘さん、小林幸夫さん、山田幸さん、吉田和宏さんらが来られ、松村も顧問として参加した。組織の名前



まち歩きツアーの様子

2009年に平野郷杭全神社の夏祭りを見に行き、だんじりの前で記念撮影。このまち歩きツアーは毎回好評で、年度を跨いだりピーターもいます。

は松村の提案で、「大阪国際ゲストハウス地域創出委員会（The Committee for Creation of Osaka International Guesthouse Area）」に決まった。議論となったのはどの地名を冠するのかという点で、釜ヶ崎、あいりん、新今宮も候補に挙がったが、手垢がついておらず外国人にもわかり易いという観点から、「大阪」となった。

組織名を決める議論のなかで、西口さんのリードのもと、以下の三つの活動指針が確認された。

(1) 日雇い労働者や野宿生活者などを排除せず、野宿からの脱却に向けた小さな雇用の創出をできる限り心がける。

(2) 簡宿の再生だけを考えるのではなく、地域へ働きかけ、外国人旅行者の存在を活かした地域づくりやまちづくりを目指す。

(3) 決して焦らず無理な投資もせず、簡宿に欠けているサービス機能は地域のなかに求め、外国人旅行者と地域をつなげるよう心がける。

また、外国人旅行者の誘致を呼び水として、将来的には、日本人のビジネスマンや旅行者が、気軽に来訪できるまちへ変えていこう、とも話し合われた。そのためにも、あいりん、釜ヶ崎、簡宿に向けられた偏見や劣悪なイメージを払拭することが大事であり、OIGの活動やこの地域の重要性や可能性など新しい潮流を、社会にアピールしていくことも確認された。

行動指針の(1)は当然のことで、当初は簡宿にレンタサイクルを配置する案が浮かび、NPO釜ヶ崎支援機構が行う自転車リサイクル事業との連携も検討されたが、実現はしなかった。(2)の趣旨は、組織名称に明確に打ち出された。簡宿は食泊分離の宿泊施設であり、とてもシンプルな「泊」の機能しかない。これは簡宿の弱みでもあるが、シンプルな「泊」に徹して、簡宿に無いサービスや機能を地域に求め、地域全体で外国人旅行者をもてなすような環境がうみ出せれば、簡宿の再生が地域の再生につながる。(3)はそうした思いから決まった。

OIGが誘致の対象と捉えたのは、団体客でない外国人、外国人個人旅行者（foreign individual tourists、以下FIT）であった。具体的には、欧米

からのバックパッカー（backpacker）と、アジアからの格安志向の若者や一般旅行者であった。OIG結成時から参加した簡宿は、ホテル中央グループの5軒（中央新館・中央・来山南館・来山北館・みかど）、東洋・太洋・パークイン、新ばし、ラッキー、福助、ダイヤモンド、赤坂の合計13軒で、OIGに入った簡宿経営者は7名であった。

この13軒のうち、太子1丁目に立地するものが11軒を占め、残りの2軒は萩之茶屋1丁目に立地している。OIGの戦略は、まずは太子1丁目をモデル地区として、FITを受入れるノウハウと経験を蓄積して、それを他の地区へと徐々に広げていこう、とするものであった。結成当初の13軒の1日当たりの収容定員は1,500名を超え、それが狭い地域に立地している。

釜ヶ崎、OIGの最大の強みは、かなりの客室規模を持つ格安ゲストハウスが集積し連携している点にあり、このような地域は日本でもここしかない。2011年4月現在のOIGの簡宿は17軒、ホテル中央グループのオアシス（2009年新築）、和香（土手下和子さん）、加賀（土手下順也さん）、レンタハイツ松本（松本勝則さん）の4軒が新たに加わった。なお、中央新館が2010年に改装してセレーネと名を変えた。

OIGの活動について

OIGとしての最初の活動は、13軒の簡宿のパンフレット『大阪の安い宿』を英語・中国語・韓国語で作成し、OIGのホームページを同じく多言語で立ち上げることであった。パンフレットの翻訳は外注すると高いので、松村研究室の中国・韓国からの留学生とゼミ生がボランティアで翻訳を担当し、パンフレットに「製作協力：阪南大学国際観光学科 松村研究室」と明記していただいた。

OIGと松村研究室との協働はこの時が初めてであったが、予想以上の教育効果があり驚いた。社会的に責任のある仕事を任されることで、学生たちが本気になり主体的に学び始めた。加えて、その成果が形となって残り、色々な関係者から感謝の声をかけられることで、学生たちが「本当にやってよかった！」と高い満足感を得たのである。この教育上の発見から、松村研究室はOIGの実働部隊として、ボランティアとして、関わって行くことになる。2005年秋に出来上がった『大阪の安

い宿』は、当時の大阪府観光交流局の支援を受けて、関西国際空港などでも配布されるようになった。

2003年に小泉純一郎首相が観光立国宣言を行い、ビジット・ジャパン・キャンペーンが官民挙げて始まり、国際インバウンドを振興しようとしていた。しかしながら、その成果は余りあがらず、社会的な関心は、真新しい事例や具体的な成功例を求めている。山田純範理事長や西口宗宏OIG委員長は、OIGの話題性を高めることを意識して戦略的に行動する。『大阪の安い宿』を作成するにしても、大阪府という「官」、阪南大学という「学」を巻き込み協働し、大阪市や大阪府の議員にも支援要請していた。色々な主体を巻き込むほど話題性は高まり、「あの釜ヶ崎が変わりつつある」という意外性もあって、マスメディアからの注目が集まり始めた。

マスメディアの報道が地域イメージの改善に、プラスに働くのかマイナスに働くのかを個別慎重に見極めながら、OIGはマスメディアからの取材依頼に積極的に対応して行く。2005年以降、年によって濃淡はあるが、新聞・テレビでの主な報道だけでも50回を超えている(表1参照)。取材対応は、山田英範さん、松村嘉久、山田純範さん、西口宗宏さん、浅田裕広さんが主に行った。このメディア戦略と、FITや日本人宿泊者の増加、地域イメージの改善などは強く連関しており、広報担当を務め多くの取材を受けた山田英範さんの功績は大きい。

2006年に入ると、OIGの活動成果を、『第2回関西元気な地域づくり発表会』で対外的に発信した(表1参照)。OIGや松村研究室は、これ以降、対外的に活動内容を発信する機会があれば、積極的に参加していくことになる。マスメディアの報道ではなかなか真意が伝わらないこともあるが、自分たちで発表するならば、確実に言いたいことが言え、伝えたいことに焦点を当てられる。対外的に広く発信することで、また社会的な注目が集まる、という相乗効果も大きかった。

2006年夏にはOIGとホテル中央グループの協力のもと、松村研究室が中心となって、FIT向けの「大阪下町ツアー」を実施した。学生ボランティアガイドの案内で、ゲストハウスに宿泊する外国人が、大阪の「ありふれた日常」と「ささやかな非日常」を体感した。この試みはFIT向け着地型ツアーの実験でもあり、その成果を踏まえて、現

在も定期的に実施している。

2006年秋には、ゲストハウスに宿泊する外国人の実態と観光ニーズを把握するため、OIGの全面的な協力を得て、松村研究室がアンケート調査を行った。その結果、従来の訪日外国人観光客とは全く異なるFIT像が、学術的に有意なデータで裏付けられる形で浮き彫りとなる。正確な外国人宿泊者数の統計と、このアンケート結果によるFIT像が合わさり、観光立国戦略でこの地域が担う重要性和可能性が再認識された。

FITが着実に増えつつあるという実績のもと、2007年は動物園前一番街やジャンジャン横丁など地元商店街への働きかけと連携に乗り出した。地元商店街でFITを歓迎してくれる店舗を選び、松村研究室がメニューやパンフレットの多言語化を支援し、OIGのゲストハウスで積極的にそれらの店舗を紹介するという試みである。その成果は、例えば、「大よし」とホテル中央グループとの朝食・ランチセット提供での連携などに結実した。全てがうまくいったわけではないが、2007年に始まる地元商店街とOIGとの連携は、大きな財産へと育っていく。2008年は目立った活動を行わなかった。

OIGの外国人旅行者誘致の実績は、2004年から2010年までの外国人のべ宿泊者数を示した表2でわかる。ホテル中央グループと東洋・太洋だけの統計であるが、2009年こそリーマンショックの影響で少し落ち込むものの、驚異的な伸びを記録している。

松村は2006年夏に、FIT誘致がテイクオフしたとの印象を持った。それ以前の外国人宿泊者はアジアの若者が多かったが、2006年夏から欧米人とアジアのファミリーが増え始めた。きっかけは、ホテル中央グループが「HOSTELWORLD.com」に登録したことにあつた。世界中のバックパッカーは、このウェブサイトで見つけ予約している。そうしたバックパッカーの行動に詳しい山田英範さんの発案から登録が試みられ、東洋・太洋を経営する浅田裕広さんもそれに続いた。

2010年、いったいどれくらいの外国人が釜ヶ崎に宿泊したのか。OIGの他のゲストハウス、簡宿組合未加入のホテルも含めるならば、少なく見積もっても、のべで9万泊を超え10万泊に迫る。これは1日平均で300名弱の外国人が、釜ヶ崎に滞在している計算になる。かつて釜ヶ崎に3万人近くいたといわれる労働者は随分と減り、簡宿の

数も最盛期の三分の1くらいまで減った。FITの誘致は成功していると評価できるが、地域全体で減り続けている労働者の穴は大きく、それを埋めるまでには至っていない。OIGの今後の課題は、FIT誘致の経験を、どのようにして地域に広めていくのにかあろう。太子1丁目を中心とするFIT誘致は、その収容能力から見て、限界に達しつつあり、新たな展開が求められている。

新今宮観光インフォメーションセンター の開設と運営

2009年から、OIGの活動は松村研究室との協働で新たな一歩を踏み出す。山田純範理事長は、かねてより、バックパッカーのバイブル Lonely Planet JAPANに、この地域が安宿街として紹介されることを夢見ていた。その夢が実現すれば、国際ゲストハウス地域へと成長する確かな道筋が見えてくると信じられている。その夢の前提条件として、地域に宿泊するFITを対象とする観光案内所を開設できないかと、2008年半ばから、大阪府や大阪市の観光関係部署、国土交通省の出先



改装して常設運営開始

2009年夏の常設運営に向けて、正面のドアを左に移動してカウンターを作った。これは英範さんのアイデアで、イメージはたこ焼き屋さんだったそうです。

機関などへ働きかけておられた。いわゆる陳情であったが、どこからも前向きな姿勢や対応は引き出せなかった。OIG のなかでも、次のまちづくりのステップへ進む起爆剤として、地域のどの簡宿の宿泊客でも利用でき、幅広い観光ニーズにも対応し地域のニーズにも対応できる施設を開けないか、とあらゆる可能性が検討された。

万策が尽きた感のあった2008年秋のとある日、山田英範さんが、「松村先生のゼミで何とか観光案内所をやってもらえませんか」と真顔で願い出た。英範さんの説得は実に巧妙であった。尻込みしていた松村とのやりとりのなかで、改めてこの地域には、観光案内所が絶対に必要であり、FITの観光行動パターンからお役所仕事の公的な観光案内所では役に立たない、「私もOIGも全面的にバックアップしますから」と説いた。

これまで積み重ねてきた信頼関係から、この言葉は重く、説得も全体的を射ており、社会的実験としても、産学連携で観光案内所を開設することはとても意義がある、と松村も共感した。ただし、解決すべき問題は山積み、学生ボランティアは集まるのか、集まった学生ボランティアで運営できるのか、FITはどんなことを尋ねてくるのか、少し考えただけで不安要素が噴出した。結局、ゼミに持ち帰り学生たちと相談したところ、意外に

あっさりと「できるかどうかとにかく試しにやってみよう」ということになった。

2009年1月26日から2月27日までの1ヶ月間、大学の春休みを利用して、観光案内所を試験的に運営した。運営場所はホテル中央グループから無償提供を受け、室内の備品その他は色々なところからかき集め、運営は全て学生ボランティアが担った。場所は「産」が提供し、運営は「学」が担うこの形態を、松村研究室では「民設学営」と名付け、産学連携のひとつの形態として位置付けた。今にして思えば、私もゼミ生たちも、OIGのメンバーや地域の人たちにうまく調子に乗せられたのかもしれない。しかし、それはとてもやりがいがあり心地よく、またやってみたくと思う仕事であり、学生たちが自ずと学び始める不思議な魅力があった。この試験的運営で蓄積した利用者の記録を徹底的に分析し、どのような形でなら常設運営できるのか、英範さんや西口さんにも加わってもらい、ゼミ生らと話し合った。その結果、これまたあっさりと、常設運営しようということに決まった。

試験的運営の際は看板もなかったもので、単に「観光案内所」と呼んでいたが、正式な名称を、新今宮観光インフォメーションセンター(Shin-imamiya Tourist Information Center、以下新今宮TIC)と

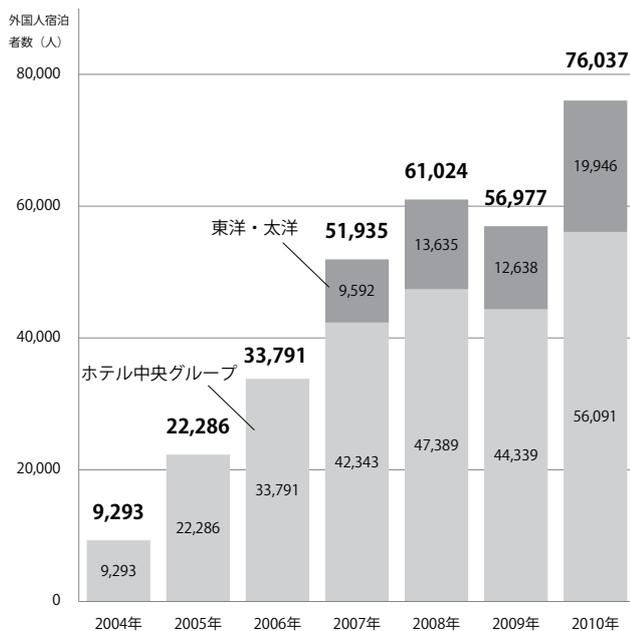


図1 ホテル中央グループと東洋・太洋の外国人宿泊者数

定めた。案内所ではなくセンターとしたのは、規模や機能は全く違うが、この地域で歴史を持つ西成労働福祉センターを意識したからである。新たなまちの核となるもうひとつのセンターを作りたいという想いがあった。ここでも、どの地名を冠するのが議論となったが、「観光」という言葉との親和性を考慮して「新今宮」に落ち着いた。新今宮TICの常設運営は2009年7月11日から始め、以来、大学の平常授業時は土日のみ、長期休暇に入ると基本的には毎日、朝9時から16時まで運営している。

活動内容は大きく、(1)利用者に対する観光情報の提供および旅の相談、(2)FIT向けの着地型まち歩きツアーの企画・実施、(3)国際観光振興やFITに関する調査研究活動およびまちづくりと関連する社会的実践、の三つとした。松村研究室としては、単に観光情報を提供する場ではなく、学生たちが集いまちづくりの拠点となるような現場共育の場にしたいという想いがある。現場共育とは松村の造語であり、学生は現場から学んで育ち、現場も学生の支援で育ち、皆が現場と関わるなかで共に育つという発想で、最近では研究室のモットーに掲げている。

最後に新今宮TICの運営実績も紹介しておきたい。2009年の運営日数は120日、利用は1,350件2,347名、ボランティアはのべ759名動員した。2010年の運営日数は170日、利用は1,624件2,791名、のべ915名のボランティアを動員した。利用の約8割が外国人で、その国籍は50ヶ国を軽く超える。2009年・2010年とも、FIT向けまち歩きツアーを6回行い、合計12回のまち歩きツアーのFIT参加者は167名、案内する側の学生ボランティアは229名にのぼる。

いずれも毎日の小さな努力の積み重ねであるが、改めて回顧するとその重みを感じる。2010年度には、OIG委員会・松村研究室・簡宿組合の連名で『大阪へ行こう！大阪で遊ぼう！アイデアプラン支援事業』の認定を受け、その助成金を活用して、『大阪の安い宿』の拡充版を作成した。拡充版には太子地区のエリアマップが盛り込まれているが、これはこれまでのOIGと地元商店街との連携の産物であり、新今宮TICを拠点としてまちづくりの現場へ飛び込んだ学生たちの努力の産物でもある。

【参考文献】

有村遊馬・松村嘉久・佐藤有(2009)「アンケート調査からみた新今宮界隈の外国人個人旅行者の実態報告：国際ゲストハウス地域の創出に向けた活動報告 その3」、『日本観光研究学会第24回全国大会論文集』、341-344頁

大阪市立大学都市環境問題研究会(2001)『野宿生活者(ホームレス)に関する総合的調査研究報告書』、556頁

佐藤有・有村遊馬・松村嘉久(2009)「新今宮観光インフォメーションセンターの活動内容と利用実績：国際ゲストハウス地域の創出に向けた活動報告 その2」、『日本観光研究学会第24回全国大会論文集』、337-340頁

松村嘉久・濱中勝司(2008)「外国人個人自由旅行者の実態報告—釜ヶ崎の簡易宿所でのアンケートと聞き取り調査から—」、『日本観光研究学会第23回全国大会論文集』、117—120頁

松村嘉久(2009)「大阪国際ゲストハウス地域を創出する試み」、神田孝治編『観光の空間—視点とアプローチ—』ナカニシヤ出版、264—274頁

松村嘉久・丸市将平(2010)「外国人向けまち歩きツアーの理論と実践」、『日本観光研究学会第25回全国大会論文集』、97-100頁

松村嘉久・佐藤有・有村遊馬(2009)「新今宮観光インフォメーションセンター設立の経緯と運営戦略：国際ゲストハウス地域の創出に向けた活動報告 その1」、『日本観光研究学会第24回全国大会論文集』、333-336頁

山田純範(2009)「労働者の街から旅行者の集う街に 外国人観光客誘致へ大胆な改革 地域と連携、さらなる情報発信へ」、『連携で切り拓くビジネスチャンス—生活衛生関係営業の連携取り組み事例—』、183-198頁。



新今宮TICの試験的運営開始前夜
何かも手作りで始まった試験的運営、入り口は正面のドアだけだった。